

高校生の頃、人の温かみに触れる機会がありました。体育の時間に足を怪我して、しばらく杖を突きながら歩いていた時期があります。

慣れない杖を使って歩くことは大変で、普通に歩いていた時の何倍も時間がかかりました。周りの反応も冷たく、舌打ちをされたこともあります。

一番、辛かったことは電車から降りた時に、エレベーターに乗り込もうとした人に後ろから体当たりされたことです。私は前に転倒し、杖を手放してしまいました。取ろうにも足は痛くて動けず、杖は私の目の前でいろんな人に踏まれていきました。通り過ぎる人は見て見ぬふりをし、助けもしてくれない。人がいなくなるまで待ち、這いながら杖の所まで行けた時には、埃まみれで汚くなっていました。

社会の冷たさを知った私は、精神的に追い込まれていました。誰も信じられない、頼ったらいけないんだ。そう思っていました。しかし、そんな気持ちを壊してくれる人に、私は出逢えたのです。

いつものように電車は満員で、座れるような席はありませんでした。空いているスペースに移動しようとする、1人の男性が私に声を掛けてくれました。

「席、変わります。座ってください」

と男性が言ってくれて、うれしさ反面申し訳なさがあり、何度もお礼をしながら席に座らせてもらいました。男性は次の駅で降りて行ったのですが、降りる前に言っていた言葉は、今も覚えています。

「僕も怪我をして辛い思いをしたことがあるんです。その時にたくさん助けてもらったから、お互い様ですよ」

お互い様。その言葉は私の胸を熱くさせ、どん底から救ってくれました。まさに一期一会でしたが、冷たい社会ばかりではないと教えてもらった大切な思い出です。